

# 夏秋イチゴ‘みやざきなつはるか’の基肥の検討

## 異なる機能性被覆肥料の組合せが生育・収量に及ぼす影響

### 背景・目的

- これまでの試験で、夏秋イチゴの基肥試験において、肥効調節型肥料を使って肥効を長くすることで、増収することを確認していました。
- 近年、他品目において、溶出パターンの異なる肥効調節型肥料を組み合わせることで、安定した肥効や増収効果が報告されています。
- そこで、夏秋イチゴにおいても、さらなる増収を目指して肥効調節型肥料の組合せ施用について検討しました。

### 成果の内容

- 慣行のエコロング100日・N1.5g/株の他、5通りの組合せ試験を行ったところ、エコロング40日・N0.5g/株＋スーパーエコロング180日・N2.0g/株では上中物収量が29%増収しました。(図1)

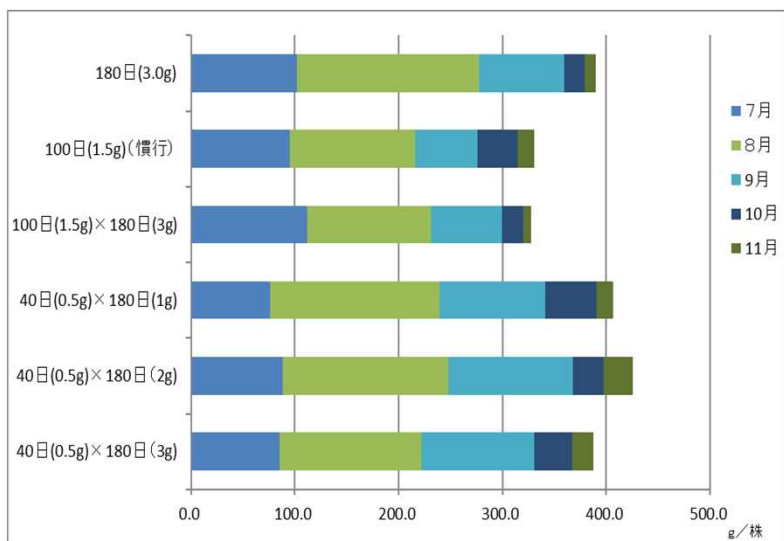


図1 株あたりの上中物収量



上：エコロング40日・N0.5g＋スーパーエコロング180日  
下：慣行(エコロング100日・N1.5g)

### 成果の活用方法(又は期待される効果)

- 夏秋栽培の「みやざきなつはるか」において、異なるタイプの肥効調節型肥料であるリニア型のエコロングトータル40日(窒素成分0.5g/株)とシグモイド型のスーパーエコロング180日(窒素成分2.0g/株)を組み合わせることによって、20%以上の増収が期待できます。
- ※地温約20℃の環境において、リニア型のエコロングは処理直後から肥料分の溶出が始まり、シグモイド型のスーパーエコロングは処理後約40日頃から肥料成分の溶出が始まります。

### 留意点

- 肥料代が慣行に比べると約12,000円/10a高くなります。
- 肥料は栽培槽内に全層施肥し、給液管理は培地内ECや廃液ECをモニターして適正に行います。

### <今後>

- 本試験ではどの試験区も10月以降に著しい収量の減少が見られることから、この時期の収量確保を目指した更なる管理技術の検討が必要です。